

歌ゆゑに命を失ふ事

天徳の御歌合のとき、兼盛と忠見は、ともに御隨身として左方と右方にそれぞれ加わっていた。「初恋」という題をいただき、忠見は、名歌を作り出したと思って、兼盛もどうしてこれほどの歌をよむことができようか、いや、よめはしないだろうと思った。

恋すてふ・・・恋をしているという私の評判は、早くも世間に広まってしまったことだよ。人に知られずひそかに思い始めたのに。

そうして、すでに帝の御前で歌をよみあげて、判定なさっていたときに、兼盛の歌として、

つつめども・・・（誰にも知られないように）つつみ隠していたが、顔色に表れてしまったことだよ、私の恋は。もの思いをしているのかと人が尋ねるほどに。

（という歌が出された。）判者たちは、（ともに）名歌であったので、判定を決めかねて、帝のご意向をうかがったところ、帝は、忠見の歌を、二、三度口ずさみなさった。兼盛の歌は、何度も繰り返し口ずさみなさった（ので、その）ときに、帝のご意向は左にあるということ、兼盛が勝ってしまった。

忠見は、落胆して、気がふさいで、食欲がなくなる病気にかかってしまった。回復の見込みがないということを聞いて、兼盛が見舞いに行ったところ、（忠見は）「格別の病気ではない。御歌合のとき、（私は）名歌を作り出したと思われましたのに、あなたの「ものや思ふと人の問ふまで」（の歌）に、あれまあと思つて、驚きあきれたことに思われてから、気がふさいで、このように病気が重くなつたのです。」と言つて、ついに死んでしまった。

執着する心はよくないけれども、歌道に熱心に打ち込む姿勢は、殊勝なことです。ともに名歌であるから、『拾遺集』に入集しているのでしょうか。